

論文

霞ヶ浦沿岸における堀之内2式土器の器種組成とその変遷

亀井 翼

霞ヶ浦沿岸を含む東関東の堀之内2式土器は、これまでの研究によって精製土器の細別が進められている。一方で、研究が特定器種に偏り、細別型式の具体的内容については不明瞭な部分が多い。そこで本稿では、堀之内2式細別型式の具体的内容を提示することを目的として、地域を限定した細別型式の変遷と、各細別における器種組成を明らかにした。まず、堀之内2式の一括出土資料について器種分類を行ったのち、磨消縄文土器に注目し

て細別段階への位置づけを行った。磨消縄文土器の出土していない陸平貝塚 DNo.3 トレンチ1・2層については、内文土器に注目して新段階に位置づけた。次に、細別段階ごとの器種組成とその変遷を提示した。堀之内2式古段階では、磨消縄文や紐線文の施されない深鉢形土器が主体となり、紐線文系粗製土器、微隆帯土器、内文土器はおそらく組成に加わらないことを指摘した。

I. はじめに

近年、東日本の縄文時代後晩期の「停滞」について、見直しが進んでいる¹⁾。東日本の縄文時代後晩期には、工芸的な遺物の発達や祭祀的な遺構、遺物の増加など、質的な面では発展が続くのに対して、遺跡数の減少、規模の縮小が広範に認められる(今村 2002)。これらのことから、環境の悪化などによって文化的停滞が起こった時期と考えられてきた(岡本・戸沢 1965 など)。しかし、加曽利 B1 式以降の竪穴住居の減少は、同一地点を長期間利用した結果である可能性が指摘され(菅谷 1995)、近年検出が増加している、環状盛土遺構が当該期における長期継続型の集落であることが明らかとなっている(阿部 1996)。また、後期前葉～中葉以降には、本州東半部で泥炭層が発達し、低地林の拡大とともに安定した湿地環境が広がるようになり、「水場遺構」が増加することも指摘されている(佐々木 2008)。具体的な遺跡出土資料の検討によれば、少なくとも動植物資源が壊滅的な被害を受けた様子はみられない²⁾。

霞ヶ浦沿岸では、環状盛土遺構は検出されていない一方、同遺構との類似性(江原 2001)が指摘されている環状貝塚は多数存在する。貝塚は後期中葉をピークとして後葉以降は減少していくのに対して、竪穴住居跡数は後期前葉をピークとし、後期中葉には激減したのち、後期後葉に再び増加する³⁾。遺跡立地に注目すると、「水場遺構」こそ検出されていないものの、後期中葉に低地の利用が本格化する(亀井 2011)。住居跡数、貝塚形成、遺跡立地のいずれも、堀之内式、加曽利 B 式間を画期とすることから、霞ヶ浦沿岸においても、この時期に居住・生産形態の再編が起こったと考えられる。特に、竪穴住居跡数がピークを迎えるのは堀之内1式であること、当地域で唯一の低湿地遺跡である茨城県美浦村陣屋敷低湿地遺跡(美浦村教育委員会編 2011)において、堀之内2式～加曽利 B1 式の「土器集積址」が検出されて

いることを考え合わせると、堀之内 2 式期にこうした変化が起こった可能性が高い。よって、堀之内 2 式の細別を進め、時間的分解能を高めることは、霞ヶ浦沿岸における居住・生業活動の再編を考える上で重要である。

霞ヶ浦沿岸を含む東関東の堀之内 2 式については、これまでの研究によって精製土器の細別が進んでいる。一方で、研究が特定の器種に偏り、細別型式の具体的内容については不明瞭な部分が多い。そこで本稿では、堀之内 2 式細別型式の具体的内容を提示することを目的として、地域を限定した型式の変遷と、各細別における器種組成を明らかにする。

Ⅱ. 研究史と問題の所在

堀之内式土器の研究史については、既に詳細なまとめや図録における解説があるため（斎藤 1978, 安孫子 1981, 西田 1989, 加納 2008）、概略を述べるにとどめる。以下では堀之内 2 式に関する研究のうち、特に編年に関わるものをまとめ、問題の所在を示す。

1. 研究史

堀之内式は、1924 年（大正 13 年）に千葉縣市川市堀之内貝塚出土の土器を標識資料として山内清男により設定された（斎藤 1978）。設定時点では標識資料自体が図示されなかったが、『日本先史土器図譜』で実質的な標識資料が示された（山内 1940）。そこでは、新旧の 2 区分、関東地方における地域差（武蔵相模のもの、下総のもの）についても言及されていた。その後、『図譜』の「新旧 2 型式」が、堀之内貝塚発掘報告における I 式、II 式の記述（西村ほか 1957, 芹沢・麻生 1957）などを経て、今日の堀之内 1 式、2 式になるとされている（斎藤 1978）。

堀之内 2 式の細分については、今橋浩一によって先鞭が付けられた。今橋は茨城県取手市中妻貝塚の土器を分類し、3 段階の階梯を示した（今橋 1979）。その後、同様の基準で東京都品川区から大田区にまたがる大森貝塚の土器を分類し、堀之内 2 式を 2a 式、2b 式、2c 式に 3 細分した（今橋 1980）。1982 年 11 月には、「シンポジウム堀之内式土器」が開催され、関東地方各地の堀之内式が図示された（市川市考古学博物館編 1982・1983）。堀之内 2 式については、文様帯上下端の沈線による区画をもって 1 式と 2 式の境とすることが示された。ただし、胴部のくびれ部分が文様帯上端となり、懸垂文の下端が開く器種の場合、文様帯下端の区画は施されない場合がある点にも言及されていた（鈴木 1982）。

シンポジウム以降、小川和博と石井寛によって堀之内 2 式の細別が示された（小川 1984, 石井 1984）。小川和博は、今橋が示した粗製土器の位置づけと編年（今橋 1979・1980）の 2 点に問題があるとして、7 段階の「形相」分類と、3 区分の編年案を提示した（小川 1984）。小川がまず指摘したのは、今橋が堀之内 2 式に紐線文を有する粗製土器（以下紐線文系粗製土器）が含まれるとした点であった。小川は 2 式の紐線文は精製土器のみに認められるとの立場から、紐線文系粗製土器は加曽利 B1 式以降であると考えた。ただし、現在の所見からはむしろ今橋が示したように（今橋 1979）、紐線文系粗製土器は堀之内 2 式に伴うと考えられている（須賀 1996, 阿部 1998）。次に指摘されたのは、今橋編年では紐線文の有無を新旧差であると考えている点であり、実際には紐線文のある土器と無い土器は並存することが多いとされた。紐線文の有無を細別の指標として考えられないことは、阿部芳郎、菅谷通保らも指摘している（阿部 1988, 菅谷 1990）。

同時期に、石井寛により堀之内2式の精製朝顔形深鉢について、型式学的5細別が示された(石井1984)。磨消縄文の文様に縦位構成を残すのは堀之内1式の要素、三角文など横位の文様は後出であり、2式の特徴であるとされた。石井の2a式は『図譜』に示されていない土器であり、石井は文様帯上下端区画文の成立をもって2式とするという立場から、1式と2a式を分離している。石井の編年は西関東に豊富な朝顔形深鉢に注目したもので、最も分解能が高いものの、2d、2e式には設定時には一括出土例がなく(石井1984)、現状では5細分はかなり困難であると指摘されている(加納2002)。

1990年には、東京都荒川区日暮里延命院貝塚の報告書が刊行された(樋泉編1990)。報告書において、堀之内2式について言及した菅谷通保によれば、第6段階貝層に図譜58図の段階、ほかの大部分の貝層からは図譜57図の段階が出土した(菅谷1990)。今橋、小川、石井の各細別、あるいは段階のまとまりは確認できなかったという。また、標識遺跡である堀之内貝塚の未図化資料が公表された(領塚1992)。そこでは、堀之内2式は今橋編年(今橋1979・1980)を参考として3細分され、日暮里延命院貝塚の資料は中段階に位置づけられている。

1994年には堀之内2式から加曽利B3式、曾谷式までが層位的に出土した、茨城県土浦市上高津貝塚A地点の発掘調査報告書が刊行された(佐藤・大内編1994)。特にXVI₂層では多量の土器が折り重なって出土しており、廃棄の一括性が高いとされている。XVI₂層出土の磨消縄文の施される精製深鉢は、そのほとんどが堀之内2式新段階のもので、報告者によれば、石井編年(石井1984)の2c式以降の資料であり、多くが2d、2e式まで下るとされている(佐藤・大内編1994)。また、この精製深鉢に共伴する紐線文系粗製土器や、内文の施される浅鉢などが堀之内2式新段階に位置付けられ、「XVI₂層の段階ですでに加曽利B1式的な粗製土器の基礎は確立していると言わざるを得ない」と指摘された(佐藤・大内編1994:100頁)。堀之内2式新段階の良好な一括資料である上高津貝塚XVI₂層の資料の公表によって、紐線文系粗製土器が堀之内2式の段階で成立していることが明らかとなり、今橋による指摘が裏付けられた。また、須賀博子は当該資料に注目し、紐線文系粗製土器が堀之内2式新段階以前から存在したことを指摘した(須賀1996)。

さて、開発に伴う発掘調査によって考古資料が増加した1980年代初頭においても、堀之内2式については限られた形態の土器しか把握されていないこと、土器の出土量が少なく、また住居跡等の生活面がほとんど確認されていないことなどが指摘されていた(庄司1981)。阿部芳郎は庄司克の指摘(庄司1981)をふまえ、堀之内2式の型式認識において、縄文施文の粗製土器が1式と2式で変化していないために、2式を構成する器種が見かけ上偏っており、したがって朝顔形の精製深鉢のみが研究対象とされること、生活遺構の少なさを問題として指摘している(阿部1988)。この問題意識に基づき、東部関東における堀之内2式成立期の型式学的推移を検討した結果、堀之内2式に特徴的に認められる8字状貼付文、紐線文はそれぞれ、1式におけるIa文様帯の集約部分に見られる刺突と、Ia文様帯の沈線に系譜することを指摘した。また、東関東の地域性として胴部文様帯の下端区画を行わない土器が存在することから、胴部文様帯下端区画の有無によって1式と2式を区分することはできないとした(阿部1988)。以上のような庄司、阿部の議論に共通するのは、これまでの研究では、磨消縄文の施された朝顔形深鉢に注目して、型式学的細分が行われてきたことを指摘し

ている点である。このため、くびれをもつ深鉢の卓越する甲信地方（阿部 1997）や、地文縄文が施される土器の卓越する東関東（阿部 1998）では、前述の朝顔形深鉢以外の土器の詳細な時期決定が困難である。そこで、阿部芳郎は住居跡一括出土事例により、堀之内 2 式古段階の器種組成を明らかにした（阿部 1998）。そこでは、磨消縄文の文様変遷だけでは編年の位置付けを明らかにできない土器群、すなわち、地文縄文の土器が卓越する様相が示された。さらに、下総台地周辺において、磨消縄文精製深鉢の型式学的特徴と一括出土事例に注目し、堀之内 2 式の 3 細分を行った（阿部 1998）。このなかで、紐線文系粗製土器は古段階には存在せず、紐線文系粗製土器の系譜を、朝顔形深鉢やくびれをもつ深鉢に施される紐線に求めることには慎重であるべきとの指摘を行った。

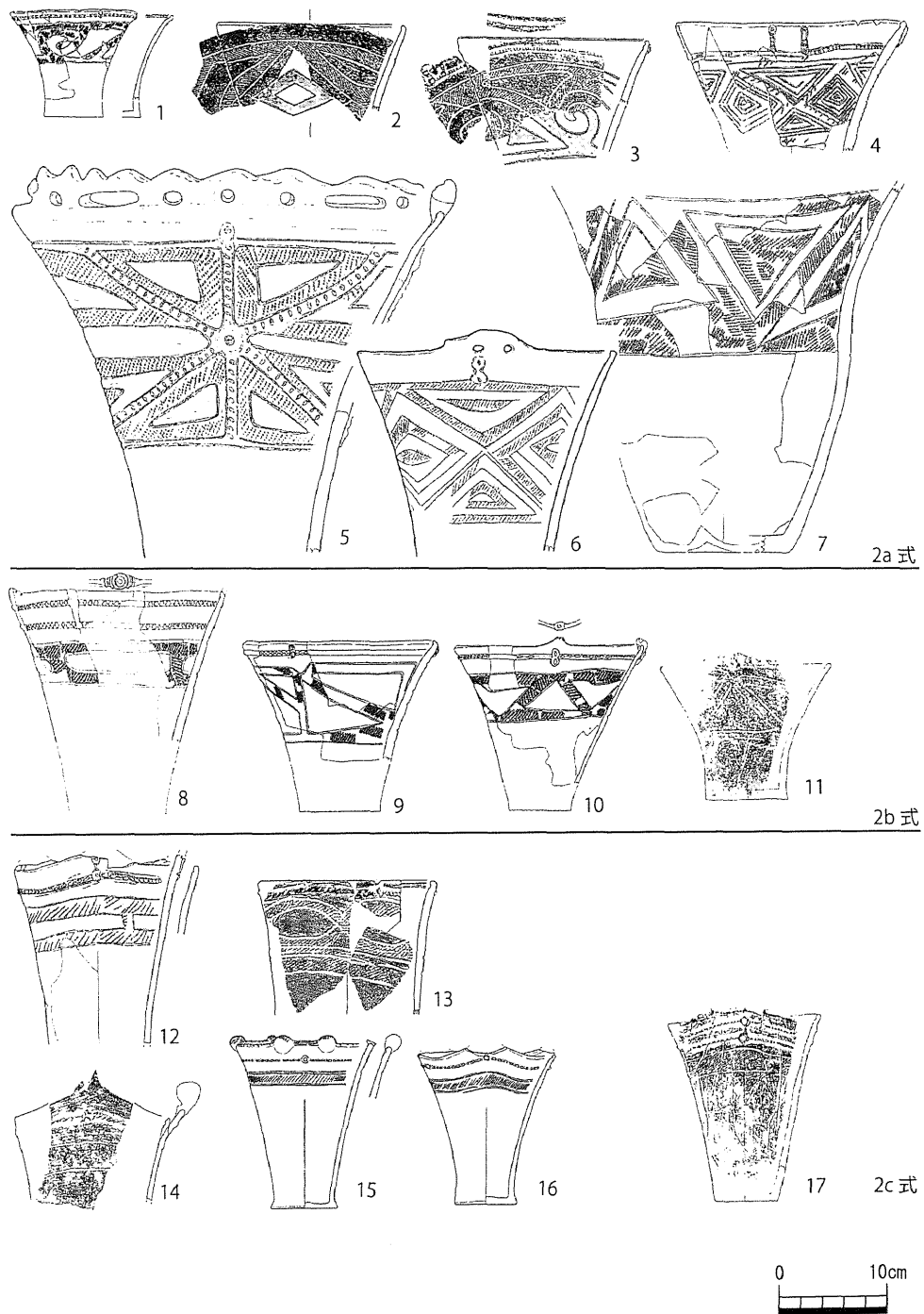
2. 研究の現状と問題の所在

これまでみてきた先行研究によって、堀之内 2 式は少なくとも 3 段階に分かれることが明らかとなっている。その中でも、阿部による 3 細分（阿部 1998）は一括出土事例に基づき、器種相互の対応関係を見据えたものであり、現状での到達点といえる。千葉県市原市能満上小貝塚を古段階、日暮里延命院貝塚を中段階、上高津貝塚を新段階としてとらえることは、他の研究者も意見を同じくしている（加納 2002, 鈴木 2012）。以下、磨消縄文の文様に注目して阿部による細分を示す（第 1 図）。

堀之内古段階（2a 式）では、磨消縄文の描線が癒着していることがあり、縄文帯の不揃いや渦巻文がみられる。また、渦巻文では文様帯の上下を区画する縄文帯から枝分かれするように縄文帯が分岐することが多い。幾何学文では、三角形や菱形といった図形の内側に、相似形の図形を描く「パネル状の磨消縄文」が見られる。この段階の資料として、千葉県印西市鎌刈遺跡第 1 号住居跡、『日本先史土器図譜』図版 57 に示される堀之内貝塚出土資料、千葉県松戸市貝の花貝塚第 28 号住居跡、能満上小貝塚 S-1 号遺構などが挙げられている。中段階（2b 式）では、「パネル状の磨消縄文」が見られなくなり、幅の広い文様帯に三角文を施す例が多くなる。渦巻文では、整然とした配置をとり縄文帯の幅が等しいものが出てくる。この段階の資料は、埼玉県加須市修理山遺跡第 12 号住居跡、千葉県船橋市宮本台遺跡第 1 号住居跡が挙げられている。新段階（2c 式）では、磨消縄文が帯状に幅狭化し、内文が発達する。上高津貝塚 A 地点 XVI₂ 層や、宮本台遺跡第 2 号住居、『日本先史土器図譜』図版 58 に示される、神奈川県横浜市荒立貝塚出土資料が、この段階を示す資料である。

堀之内 2 式の細別に関する課題として、これまで粗製土器と考えられてきた土器の系統的な分類と編年作業が挙げられる（阿部 1998）。阿部により古段階の器種組成は示されたが、中段階、新段階における器種組成とその変遷を明らかにする必要がある。また、本稿で対象とする霞ヶ浦沿岸を含む茨城県域では、斎藤弘道によって出土土器の集成が行われ、堀之内 2 式では地文縄文の土器が卓越する様相が示された（斎藤 2006）。阿部芳郎は斎藤の集成をうけて、細別型式の具体的な内容を実際の遺跡で検討するという課題を挙げている（阿部 2007）。

そこで本稿では、近年公表された資料を踏まえ、地域を限定した型式の変遷と、各細別における器種組成を明らかにし、堀之内 2 式の細別型式の具体的な内容を提示する。



第1図 東関東における堀之内2式の編年案（阿部 1998 による）
 1-3：鎌刈遺跡 4・7：能満上小貝塚 5・6：貝の花貝塚 8-10：修理山遺跡
 11・17：宮本台遺跡 12-16：上高津貝塚A地点

Ⅲ. 資料

1. 分析方法

本稿では一括出土事例に注目し、出土単位ごとの土器群を分析単位とする。対象とするのは図化された堀之内2式土器のうち、口縁部が残存するか、胴部片で特徴的な文様を有し、器種認定できるものとする。分析に先立ち、器形と装飾に注目して、以下の器種に分類する。磨消縄文土器は、充填縄文あるいは磨消縄文が施される土器である。器形は外反するか直線的に立ち上がる深鉢が多いが、くびれるものもある。紐線文系粗製土器は、指頭押圧などで装飾される紐線文をもち、磨消縄文が施されない深鉢形土器である。深鉢は、磨消縄文土器、紐線文系粗製土器以外の深鉢形土器を一括する。沈線文を施すもの、地文のみ、あるいは無文のものがある。微隆帯文土器は中塚貝塚出土資料から提示された土器である（鈴木・鈴木編 1981）。口縁部で内湾する鉢形の器形で、地文縄文を施し、口縁部に断面三角形の粘土紐を廻らせるものである。鉢は微隆帯文土器、内文土器以外の鉢形土器を一括する。内文土器は多条の沈線が内面に施される土器である。器形は浅鉢形か鉢形が多い。浅鉢は内文土器以外の浅鉢形土器を一括する。注口は胴が張り注口をもつ土器、壺は頸部がすばまり胴部に最大径をもつ土器をそれぞれ一括する。磨消縄文土器、内文土器などの突起部分のみで、器種が判定できないものはその他とした。

分析にあたり、まずは磨消縄文土器について、前述した古・中・新の3段階の細別型式を判定する。次に、磨消縄文土器との共伴関係と型式学的検討から、内文土器の細別時期を決定する。このことによって、一括出土事例が細別時期に位置づけられ、堀之内2式の各段階における器種組成とその変遷を提示することができる。無論、報告書に掲載された資料の器種組成が、当時、実際に使用されていた土器のセット関係と同じとは必ずしもいえないが、組成の変化や新たな器種の出現を検討する上では、大勢に影響はないと考える。

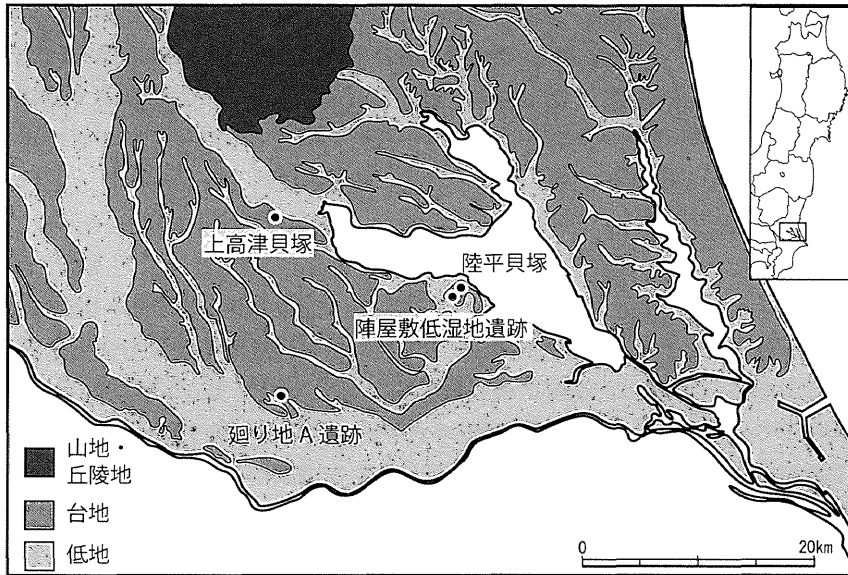
2. 対象遺跡と分析単位

(1) 廻り地 A 遺跡

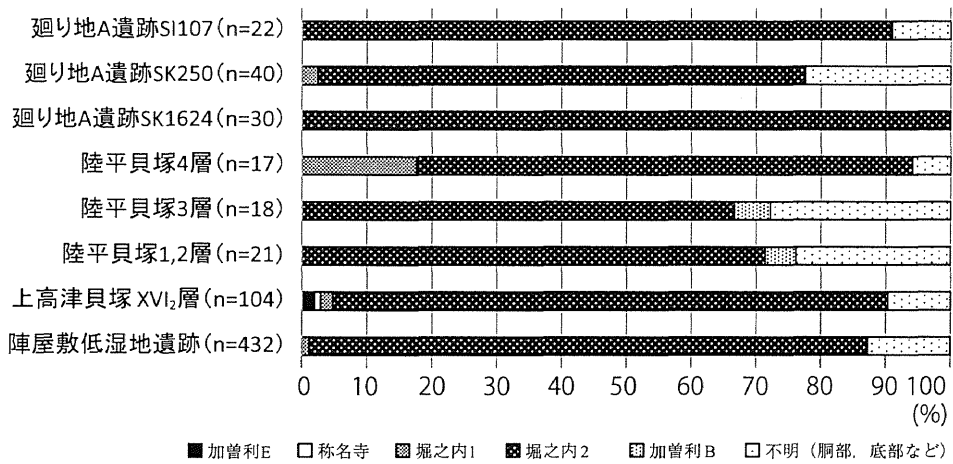
廻り地 A 遺跡は、筑波稲敷台地南部、利根川の沖積低地を南西に臨む台地上に立地する（第2図）。大羽谷津遺跡の名で存在が知られていた遺跡であり（茨城県教育委員会 1971）、1979～81年、竜ヶ崎ニュータウン建設に伴い発掘調査が行われた。その結果、環状に分布する126軒の竪穴住居跡、埋設土器や地点貝塚を含む1877基の土坑、方形周溝墓が検出された（茨城県教育財団 1982）。縄文土器は加曾利 EIV 式から堀之内2式にかけて出土しており、住居跡の帰属時期をみると堀之内1式が最も多い。本稿で対象とする遺構は107号住居跡および250、1624号土坑である。対象とする図化資料全点の型式組成を第3図に示す。これらの資料は、茨城県における堀之内2式古段階の代表例として挙げられている（斎藤 2006）。

(2) 陸平貝塚

陸平貝塚は霞ヶ浦南岸、筑波稲敷台地の北東端に位置し、周囲を沖積低地に囲まれ島状に独立している。遺跡は台地の平坦部を囲むように存在する8つの貝塚から成り、これまでの調査によって縄文時代早期末から後期の貝層が確認されている。本稿で対象とするのはD貝塚 No.3 トレンチ（以下 DNo.3 トレンチ）の貝層出土資料である（美浦村教育委員会編



第2図 対象遺跡



第3図 対象一括資料の型式組成

2012)。本トレンチの貝層は1～4層に分層されており、4層の途中が発掘調査の下限である。1層は混土貝層であり、層厚は約10 cm、ハマグリが最も多くサルボウ、アカニシなどの貝殻に黒褐色土が混じっている。2層は1層と3層の間に部分的に見られる黒褐色土壌の間層であり、層厚は約5 cmである。3層は層厚が約30 cmの混土貝層であり、ハマグリ主体でありバカガイを含む。4層はハマグリ主体であるが大形のもの少なく、サルボウがブロック的に含まれる点で3層と区別される。発掘限界までの層厚は約20 cmである。また、3層、4層相当層を掘りこんで炉跡が検出されている。1層、2層は特異な貝種組成を示すことから、この炉跡に伴う堆積と考えられている(樋泉 2012)。

遺物の出土状況と層序の所見から、1および2層、3層、4層をそれぞれ一括出土事例として分析対象とする。1層と2層は前述の炉跡との関係と、1層、2層で接合する土器があるため一括して取り扱う。各層出土土器の型式組成を見ると、1・2層、3層は若干の加曽利B1式を含んでいるのに対して、4層では堀之内1式を含んでいる(第3図)。それぞれ上位、下位からの土器の混入が考えられるものの、各層で堀之内2式が約7割を占めており、当該時期の一括資料と考えてよいと思われる。なお、貝層直上の包含層(II層)は、加曽利B1式を主体とする。

(3) 上高津貝塚

上高津貝塚は霞ヶ浦に注ぐ桜川右岸の筑波稲敷台地上に立地する。台地平坦面を取り巻くように、A、B、Dの3つの貝層が分布している。江見水蔭の『探検実記 地中の秘密』に発掘の記事があり(江見 1909)、古くから知られていた遺跡である。大山史前学研究所によっても発掘が行われたが、その資料は全て戦災で失われてしまったとされている(佐藤・大内 1994)。戦後は慶應義塾高等学校考古学会、慶應義塾大学考古学研究会によってA地点貝塚の発掘調査が行われ、定量的なブロックサンプリングに基づく動物考古学的研究が行われている(小宮 1970、小宮・鈴木 1977)。さらに、東京大学総合研究資料館によるB地点の発掘調査では、概ね後期後葉から晩期の土器が出土している(Akazawa 1972)。1990年以降は史跡整備に伴ってA地点、C地点、E地点の発掘調査が行われ、C地点では完形の製塩土器、竪穴住居跡や墓域が、E地点では掘立柱建物跡や土器製塩との関連が想定されている大型の屋外炉などが検出されている(佐藤・大内 1994、土浦市遺跡調査会編 2000、土浦市教育委員会編 2006)。

本稿で対象とするのは1990年に慶應義塾大学によって発掘されたA地点貝塚XVI₂層出土土器である。トレンチは幅1 m、長さ3.75 mで、斜面の傾斜方向に沿って設定された。発掘の結果、土壌層と互層をなして堆積した貝層群を5群検出し、後期中葉を中心として加曽利E式から安行1式までの各型式の土器が層位的に出土した(佐藤・大内 1994)。XVI₂層は発掘限界下部付近で検出された多量の土器や獣骨を包含した混貝土層である。図化資料には加曽利E式、称名寺式、堀之内1式を若干含むものの、堀之内2式が8割以上を占め(第3図)、良好な一括出土遺物であると考えられる。

(4) 陣屋敷低湿地遺跡

陣屋敷低湿地遺跡は霞ヶ浦南岸、陸平貝塚の立地する台地を開析する谷底平野に立地する。本遺跡は、弥生時代から古代におよぶ集落跡(陣屋敷遺跡)に付帯する耕作地を発見す

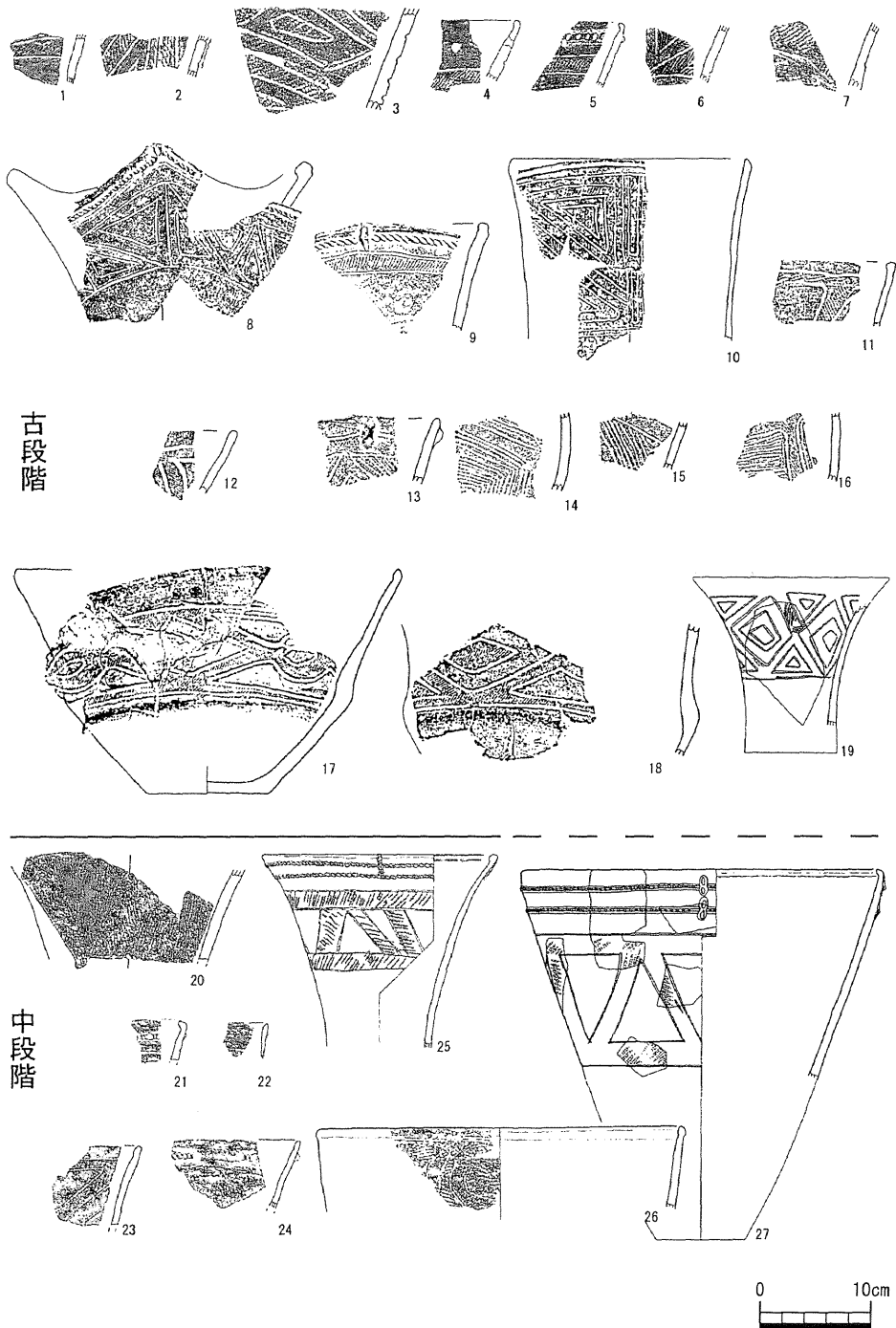
ることを目的として、1989年に実施された確認調査で発見された。弥生時代以降の水田址が検出されたほか、その下位から大量の縄文後期の土器片が出土した（美浦村教育委員会編 2011）。この「土器集積址」は遺物出土状況と接合関係から、流水など自然営力によって堆積したものではなく、「直接的かつ2次的に廃棄されたもの」であるとされている（美浦村教育委員会編 2011）。報告書で図示された資料はそのほとんどが堀之内2式～加曾利B1式に帰属する（第3図）。

IV. 結果と考察

1. 磨消縄文土器の細別時期（第4・5図）

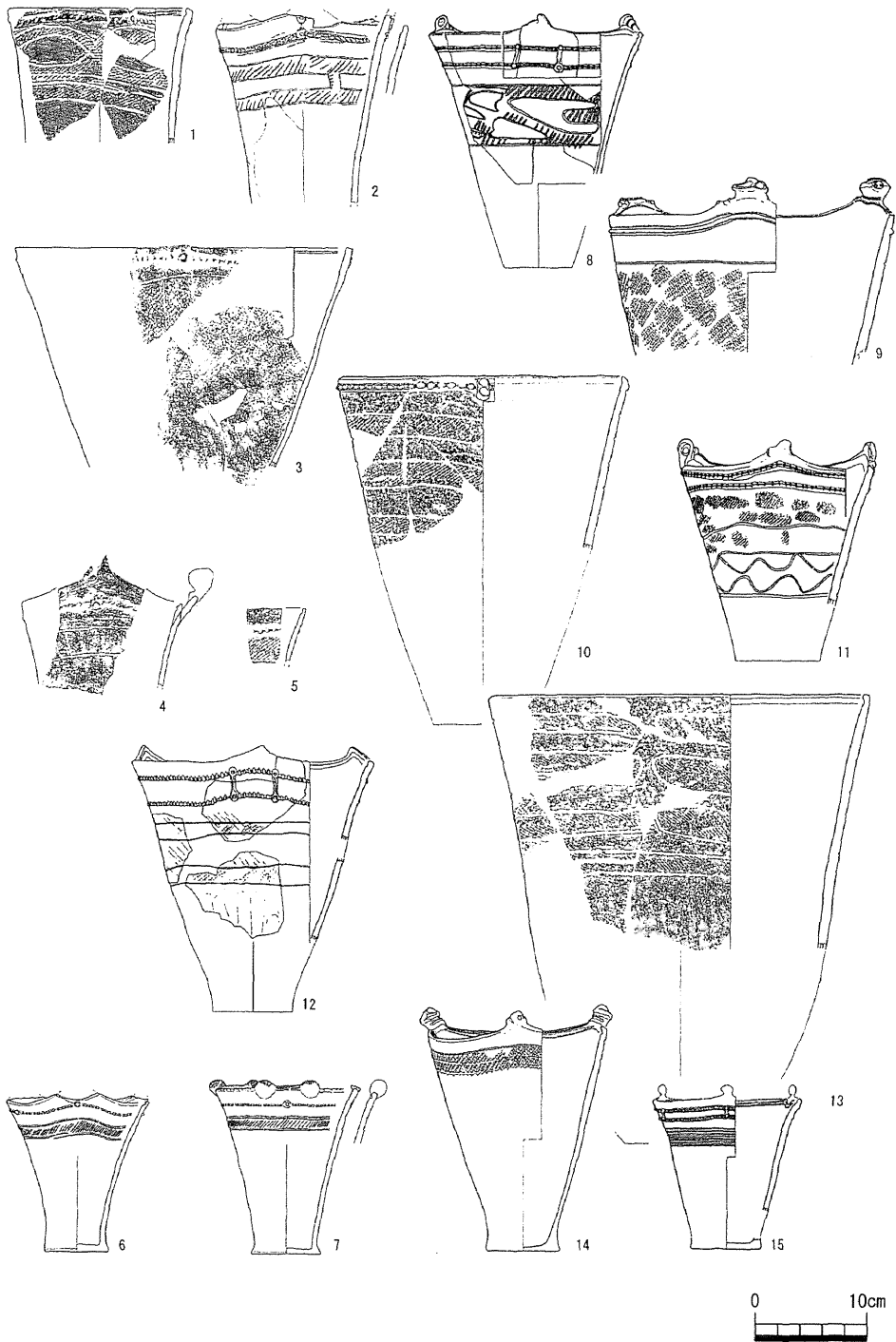
廻り地A遺跡107号住居出土例は、区画文を縄文と多重の沈線によって充填している（第4図13～16）。幾何学的なモチーフと多重沈線から、古段階に位置付けられる。250号土坑の土器は小破片であるが、磨消縄文のモチーフは幾何学的であり、少なくとも中段階以前に位置付けられる。1624号土坑出土例は「パネル状磨消縄文」が見られることから古段階に位置付けられる。図化点数が少なく、器種組成の検討には対象としなかったが、110号土坑出土の磨消縄文土器もこの段階の資料である。陸平DN_{0.3}トレンチ4層出土の磨消縄文土器には、全体が覗える資料はない（第4図1～3）。しかし、縦位の隆帯が認められること、磨消縄文のモチーフは三角形あるいは菱形で、かつ「パネル状磨消縄文」が認められることから、古段階に位置づけられる。3層出土土器も小破片のみであるが、幾何学的なモチーフで沈線施文後に充填縄文を施文し、沈線の引きなおしが認められない（第4図4～7）。これらの特徴から、中段階以前、おそらく古段階に位置づけられる。上高津貝塚XVII₂層出土土器は、三角形の磨消縄文をもち、中段階以前と考えられるもの（第4図20～24）も混在しているが、多くは横帯化した磨消縄文をもつ（第5図1～7）。加えて、幅の広い文様帯に三角形の磨消縄文をもち、中段階に位置付けられる第4図25が、XVI₂層下位のXVII層より層位的に出土している。これらのことから、XVI₂層出土資料の多くはこれまでの研究成果と同じく、新段階と考えられる。このなかでも、∞状や横帯が上下に連結する磨消モチーフをもつものが古相であることが指摘されている（阿部1998）。器形の面では、外反が弱く、波頂に突起をもつ3単位の波状口縁が認められる。陣屋敷低湿地遺跡出土の磨消縄文深鉢は、複数段階が混在している（第4・5図）。まず、菱形の「パネル状磨消縄文」の認められる第4図19は古段階に、三角形のモチーフを持つ第4図27は中段階以前に位置づけられる。それに対して、3単位の波状口縁をもち帯状の磨消縄文をもつ第5図8などは新段階に位置づけられる。

対象遺跡出土の磨消縄文深鉢を型式学的変化に沿って観察すると、段階によって変化する属性を指摘することができる。まず、紐線状の装飾手法は古段階、中段階までは棒状工具の押圧が多いのに対して、新段階では紐線文系粗製土器と同様の指頭押圧が出現する。次に口縁部断面形態に注目すると、古段階ではくの字状に内屈する口縁部が多いのに対して、新段階では蒲鉾状あるいは外削ぎの形態で、内文が施されるものが認められる。ただし、中段階の日暮里延命院貝塚では、内屈する口縁部と、蒲鉾状あるいは外削ぎ状の口縁部が1個体に共存する例があることから（菅谷1990）、必ずしも時期差とはいえないかもしれない。さらに、器形の面では、古段階は朝顔形の深鉢やくびれを持つ鉢など多様な器形に磨消縄文が施



第4図 霞ヶ浦周辺の堀之内2式磨消縄文土器（古・中段階）

- 1-3：陸平貝塚4層 4-7：陸平貝塚3層 8・9：廻り地A遺跡SK110
 10-12：廻り地A遺跡SK250 13-16：廻り地A遺跡SH07 17・18：廻り地A遺跡SK1624
 19・26・27：陣屋敷低湿地遺跡 20-24：上高津貝塚XVI₂層 25：上高津貝塚XVII層



第5図 霞ヶ浦周辺の堀之内2式磨消縄文土器（新段階）

1-7：上高津貝塚 XVI₂ 層 8-15：陣屋敷低湿地遺跡

文されるのに対して、新段階では直線的に立ち上がる深鉢にのみ磨消縄文が施文される。また、三単位の波状口縁をもち、波頂部に突起がつく器形は新段階から認められる。これに対して、既に指摘されているように（阿部 1988, 菅谷 1990）、8 字状貼付文や紐線文の有無、その条数、縄文原体は時期によって変化しているとは考えにくい。縄文充填後の沈線の引きなおしは新段階で多くなるようであるが、古段階でも観察される。

2. 内文土器の細別時期

内文土器は、陸平貝塚 DNo.3 トレンチ 1・2 層、上高津貝塚 XVI₂ 層、陣屋敷低湿地遺跡で出土している（第 6 図）。陸平貝塚 1・2 層出土例（第 6 図 1）は、外面に RL 縄文を施し、内面に 4～5 本の沈線を施すが、沈線の間隔が一定でない上、綺麗な同心円を描かず線が斜めになったりしている点から、粗雑な印象を受ける。類例として上高津貝塚 XVI₂ 層出土の第 6 図 3 が挙げられる。第 6 図 4～6 では、沈線間や口唇部にキザミが施される。それに加えて、第 6 図 4 では突起と突起周辺の渦巻状沈線文が、第 6 図 6 では沈線の上下連結が見られる。

これらの土器は、上高津貝塚における磨消縄文土器との共判から堀之内 2 式新段階に位置付けられる。そのなかでも、地文縄文が施され、沈線が雑な陸平貝塚例（第 6 図 1）はより古相に位置付けられるであろう。それに対して、沈線間の上下連結や沈線間のキザミといった、加曽利 B1 式の内文土器にみられる特徴を有する第 6 図 4 や 5 は、新しい様相を示すと考えられる。これらの土器の後続として、上高津貝塚では、XVI₂ 層の上位にあたる XIV 層から、加曽利 B1 式に位置づけられる内文土器（第 6 図 9）が出土している。陸平貝塚においても II 層から加曽利 B1 式の内文土器（第 6 図 10）が出土しており、層位的にも矛盾なく次の加曽利 B1 式に系統的に変化していく様相が見て取れる。

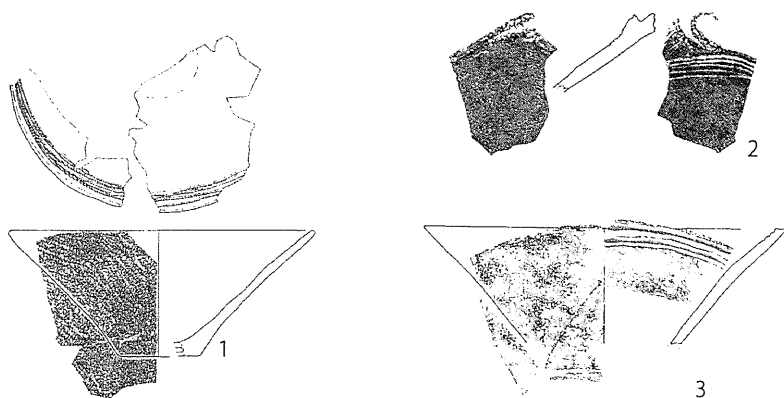
3. 器種組成とその変遷

前節までの結果から、対象一括資料の細別時期を決定できる。廻り地 A 遺跡、陸平 DNo.3 トレンチ 4 層、3 層が古段階に、陸平 DNo.3 トレンチ 1・2 層、上高津貝塚 XVI₂ 層が新段階に位置付けられ、陣屋敷低湿地遺跡は新段階を中心とした各時期の混在と考えることができる。

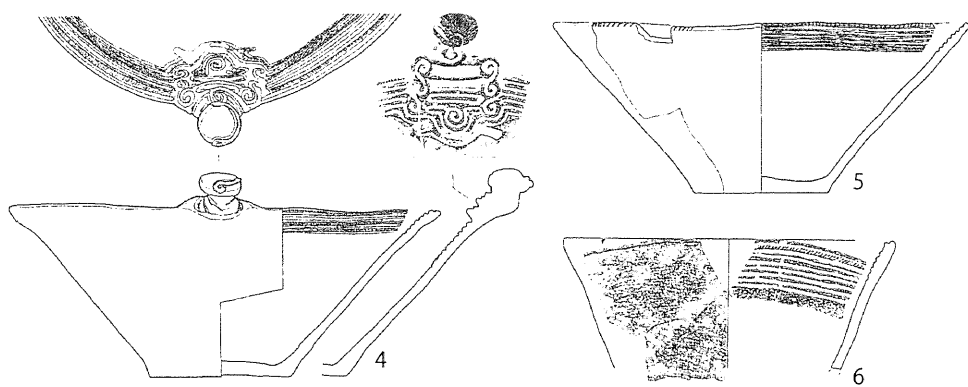
対象資料の器種組成の変遷を第 7 図に示す。廻り地 A 遺跡の古段階の資料では、深鉢が約 8 割を占めており磨消縄文土器がこれに次ぐ。紐線文系粗製土器、微隆帯文土器、内文土器は認められない。陸平貝塚の古段階の資料では、4 層で廻り地 A 遺跡と同様の組成を示し、3 層では紐線文系粗製土器、微隆帯文土器が若干含まれる。ただし、3 層の型式組成をみると新しい型式が若干混在していることから、紐線文系粗製土器、微隆帯文土器が堀之内 2 式古段階の器種組成に含まれるかどうかは、今回対象とした資料だけでは判断できない。むしろ、廻り地 A 遺跡の器種組成を考え合わせると、紐線文系粗製土器、微隆帯文土器、内文土器は、古段階には存在しないのではないだろうか。

新段階の資料では、紐線文系粗製土器、微隆帯文土器、内文土器が組成されるようになる。紐線文系粗製土器が器種として明確化する様相が認められるのは、既に指摘されているとおりである（阿部 1998）。

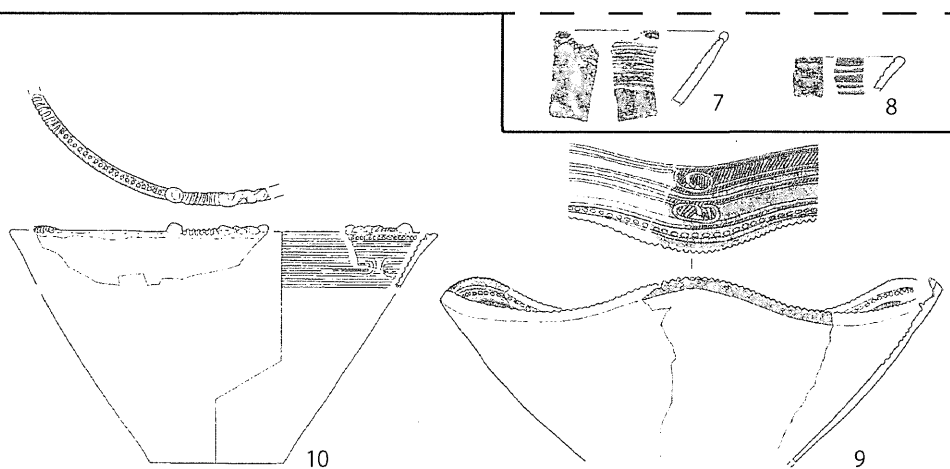
堀之内2式新段階(古)



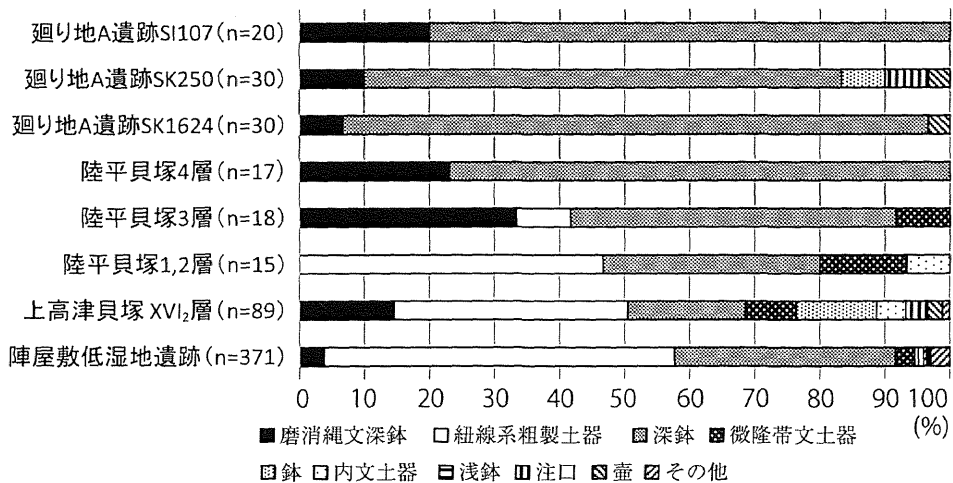
堀之内2式新段階(新)



加曾利B1式



第6図 霞ヶ浦周辺の堀之内2式～加曾利B1式内文土器
1: 陸平貝塚1層, 2層が接合 2・10: 陸平貝塚包含層II層
3-6: 上高津貝塚 XVI₂層 7-9: 上高津貝塚 XIV層

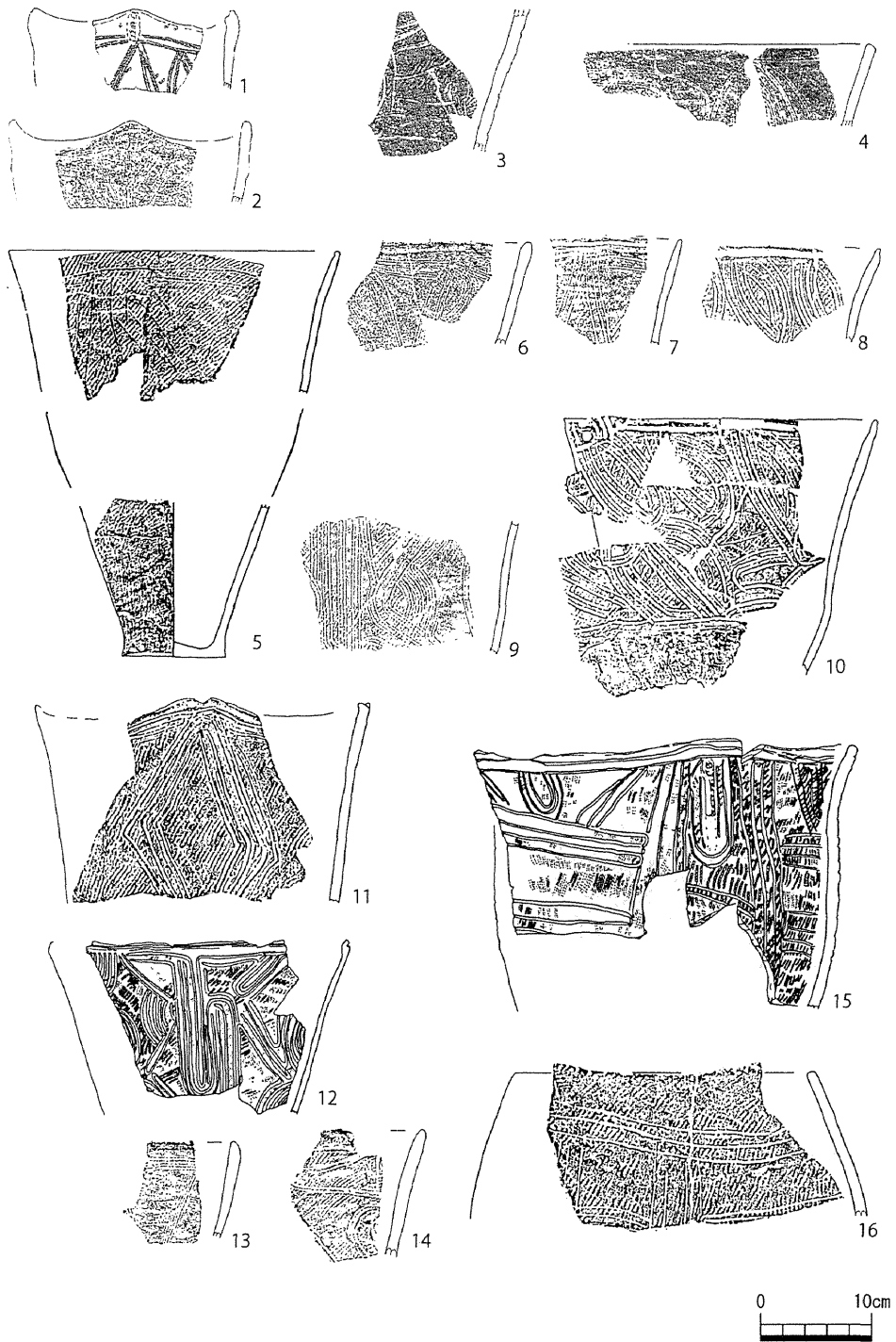


第7図 対象一括資料における堀之内2式の器種組成

また、磨消縄文や紐線文の施されない深鉢形土器には、縄文地に半裁竹管や棒状工具で沈線文様を施すものがあり、東関東の堀之内2式の特徴とされている(阿部 1998)。これらの文様モチーフには、「介」字状の懸垂文や、直線的な幾何学文様がある。文様モチーフや施文方法には、細別段階による変化は認められず、堀之内1式からみられる「介」字状懸垂文の伝統が、新段階まで受け継がれていることがわかる(第8図、第9図)。

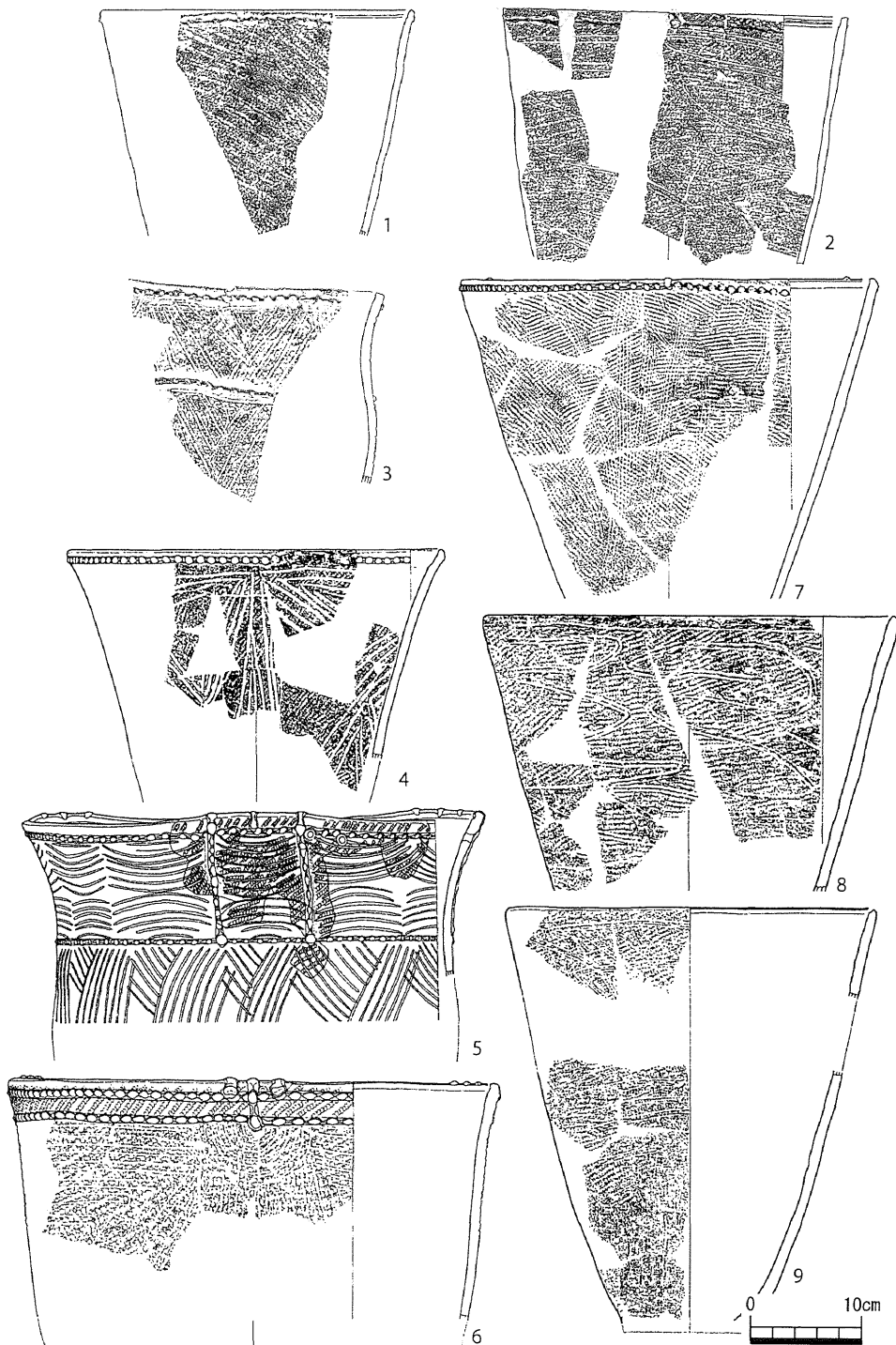
V. まとめ

霞ヶ浦沿岸地域の堀之内2式一括出土資料について、細別段階への位置づけを行った。さらに、器種組成とその変遷を、細別段階に従って提示した。その結果、磨消縄文土器について、紐線上の刻みの施文手法などに、細別段階を反映する変化が認められた。また、上高津貝塚における磨消縄文土器との共伴関係を敷衍し、陸平貝塚 DNo.3 トレンチの内文土器を新段階に位置づけた。さらに、器種組成の変遷から、紐線文系粗製土器、微隆帯土器、内文土器は恐らく古段階には組成されないことを指摘した。なお、上高津貝塚 XVI₂層の新段階の土器は、より細分される可能性があることは指摘されていたが(阿部 1998)、陸平貝塚の貝層1・2層出土の内文土器においても、新段階のなかで型式学的な新旧が認められた。一方で、今回の分析対象には中段階のみでまとまる資料はなかった。このため、器種組成のより正確な変遷や、新たな器種がどのように生じたのかについては、今後の課題である。



第8図 縄文地に沈線で文様が描かれる深鉢（古段階）

1-4：陸平貝塚3層 5・6：廻り地A遺跡 SI107 7-10：廻り地A遺跡 SK2501 11-16：廻り地A遺跡 SK1624



第9図 縄文地に沈線で文様が描かれる深鉢（新段階）
 1：陸平貝塚2層 2・3：上高津貝塚 XVI₂層 4-9：陣屋敷低湿地遺跡

謝辞

本研究は平成 24 年度笹川科学研究助成（研究課題：霞ヶ浦沿岸における縄文時代後期前葉土器群の研究）による成果である。また、資料の実見にあたり、以下の方々、機関にお世話になりました。末筆ではありますが、記して感謝の意を表します。

石川功、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、中村哲也、馬場信子、美浦村埋蔵文化財センター、龍ヶ崎市歴史民俗資料館（50 音順、敬称略）

註

- 1) 2014 年 11 月 15 日に、明治大学先史文化研究により、縄文時代後晩期停滞説を再検討するシンポジウム「縄文文化の繁栄と衰退」が開催された。同シンポジウムはその後、2015 年 11 月 29 日に第 2 回、2016 年 8 月 27 日に第 3 回が開催されている。
- 2) 2015 年 6 月 14 日に上高津貝塚ふるさと歴史の広場で実施したミュージアムセミナーにおける樋泉岳二、佐々木由香らの発表に基づく。
- 3) 上述のシンポジウムにおいて筆者発表。詳細については稿を改めて論じたい。

参考文献

- Akazawa, T. (ed.) 1972 *Report of the Investigation of the Kamitakatsu Shell-Midden Site*. Tokyo, The University Museum and The University of Tokyo.
- 安孫子昭二 1981 「関東・中部地方」野口義麿編『縄文土器大成 3 後期』講談社 144-152 頁。
- 阿部芳郎 1988 「堀之内 2 式型式基礎論考 (I) - 関東東部地域における成立期の諸相 -」『貝塚博物館紀要』第 15 号 千葉市立加曾利貝塚博物館 7-20 頁。
- 阿部芳郎 1996 「縄文のムラと『盛土遺構』」『歴史手帖』第 24 巻第 8 号 9-19 頁。
- 阿部芳郎 1997 「堀之内 2 式の器種構成と組成率 - 池之元遺跡における堀之内 2 式土器の構成といわゆる「精製」「粗製」土器の認識に関する型式学的問題 -」富士吉田市史編さん委員会編『池之元遺跡発掘調査研究報告書』富士吉田市史資料叢書 14 富士吉田市史編さん室 110-125 頁。
- 阿部芳郎 1998 「堀之内 2 式土器の構成と地域性 - 下総台地における堀之内 2 式土器成立期の様相 -」『縄文時代』第 9 号 57-79 頁。
- 阿部芳郎 2007 「書評『茨城県立歴史館史料叢書 9 茨城の縄文土器』」『茨城県史研究』第 91 号 93-96 頁。
- 石井 寛 1984 「堀之内 2 式土器の研究（予察）」港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編『調査研究収録』第 5 冊 1-47 頁。
- 茨城県教育委員会 1971 『茨城県における開発区域遺跡分布調査報告（1）』。
- 茨城県教育財団 1982 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 7 - 廻り地 A 遺跡（上）（下） -』茨城県教育財団文化財調査報告 XV。
- 今橋浩一 1979 「中妻貝塚出土の堀之内 2 式土器について」鈴木正博・鈴木加津子編『取手と先史文化 - 中妻貝塚の研究 -』上巻 取手市教育委員会 259-288 頁。
- 今橋浩一 1980 「堀之内土器について」大田区史編纂委員会編『大田区史（資料編）考古 II』大田区 137-162 頁。
- 今村啓爾 2002 『縄文の豊かさと限界』山川出版社。

- 江原 英 2001 「環状貝塚・環状盛土遺構」縄文時代文化研究会編『第1回研究集会発表要旨 縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会 79-88 頁.
- 江見水蔭 1909 『探検実記 地中の秘密』博文館.
- 岡本 勇・戸沢充則 1965 「関東」鎌木義昌編『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社 97-132 頁.
- 小川和博 1984 「堀之内Ⅱ式土器編年の課題－東関東地方を中心として－」『奈和－15周年記念論文集－』奈和同人会 49-71 頁.
- 加納 実 2002 「南関東における堀之内式土器の様相」谷藤保彦・関根愼二編『後期前半の再検討』縄文セミナーの会 3-17 頁.
- 加納 実 2008 「堀之内式土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション 568-593 頁.
- 亀井 翼 2011 「霞ヶ浦南岸における地形発達が縄文時代遺跡分布の認識に及ぼす影響」『考古学研究』第58巻第1号 66-77 頁.
- 小宮 孟 1970 「捕獲対象魚からみた漁撈活動の側面－特に上高津貝塚を中心として－」慶應義塾大学考古学研究会OB会編『慶應義塾大学考古学研究会報告』1 慶應義塾大学考古学研究会OB会 11-38 頁.
- 小宮 孟・鈴木公雄 1977 「貝塚産魚類の体長組成復元における標本採集法の影響について－特にクロダイ体長組成について－」『第四紀研究』第16巻第2号 71-75 頁.
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995 『修理山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第158集.
- 財団法人市原市文化財センター編 1995 『市原市能満上小貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書 第55集.
- 斎藤弘道 1978 「堀之内式土器研究のあゆみ」『茨城県歴史館報』第5号 105-124 頁.
- 斎藤弘道 2006 『茨城の縄文土器』茨城県立歴史館史料叢書9 茨城県立歴史館.
- 佐々木由香 2008 「水場遺構」『縄文時代の考古学5 なりわい』同成社 51-63 頁.
- 佐藤孝雄・大内千年編 1994 『上高津貝塚A地点』慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報9 慶應義塾大学民族学・考古学研究室.
- 庄司 克 1981 「堀之内Ⅱ式土器小考(1)－千葉県北部における分布とその様相－」『貝塚博物館紀要第7号』33-41 頁.
- 市立市川考古博物館編 1982 『シンポジウム堀之内式土器資料集』市立市川考古博物館.
- 市立市川考古博物館編 1983 『シンポジウム堀之内式土器の記録』市立市川考古博物館.
- 須賀博子 1996 「縄文土器における精製・粗製深鉢成立過程の地域差と共通性－縄文時代後期前半の関東南部を中心に－」『駿台史学』第97号 1-53 頁.
- 菅谷通保 1990 「堀之内Ⅱ式土器について」樋泉岳二編『日暮里延命院貝塚』東京都荒川区教育委員会 525-528 頁.
- 菅谷通保 1995 「竪穴住居から見た縄紋時代後・晩期」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』6 97-142 頁.
- 鈴木徳雄 1982 「南関東東部」市立市川考古博物館編『シンポジウム堀之内式土器資料集』市立市川考古博物館 29-38 頁.
- 鈴木徳雄 2012 「堀之内式土器研究の諸問題－堀之内式の概観と周辺諸型式－」谷藤保彦・関根愼二編『縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会 71-131 頁.
- 鈴木正博・鈴木加津子編 1981 『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－』下巻 取手市教育委員会.

- 芹沢長介・麻生 優 1957 「堀之内貝塚エ, ミ, キ, モ, サ地点発掘報告」『人類学雑誌』第 65 巻第 5 号 38-43 頁.
- 土浦市遺跡調査会編 2000 『国指定史跡 上高津貝塚 E 地点』土浦市教育委員会.
- 土浦市教育委員会編 2006 『国指定史跡 上高津貝塚 C 地点』.
- 樋泉岳二編 1990 『日暮里延命院貝塚』東京都荒川区教育委員会.
- 樋泉岳二 2012 「陸平貝塚 2010 年度調査で採集された動物遺体群」『陸平貝塚－調査研究報告書 6・2010 年度確認調査の成果－』美浦村教育委員会 38-59 頁.
- 西田泰民 1989 「堀之内・加曾利 B 式土器様式」小林達雄・小川忠博『縄文土器大観』4 後期晩期 続縄文 小学館 281-286 頁.
- 西村正衛・玉口時雄・金子浩昌 1957 「堀之内貝塚リ, ハ, エ地点発掘報告」『人類学雑誌』第 65 巻第 5 号 21-37 頁.
- 美浦村教育委員会編 2011 『陣屋敷低湿地遺跡』.
- 美浦村教育委員会編 2012 『陸平貝塚－調査研究報告書 6・2010 年度確認調査の成果－』.
- 宮本台遺跡調査団編 1974 『宮本台 I・II』船橋市教育委員会.
- 山内清男 1940 「堀之内式」『日本先史土器図譜』第一部（関東地方）第六輯 図版 50-59.
- 八幡一郎編 1973 『貝の花貝塚』松戸市文化財調査報告第 4 集 松戸市教育委員会.
- 領塚正浩 1992 「堀之内貝塚出土の堀之内式土器」市立市川考古博物館編『堀之内貝塚資料図譜』市立市川考古博物館研究調査報告第 5 冊 63-85 頁.

図出典

- 第 1 図 1-3：阿部 1998 4・7：財団法人市原市文化財センター編 1995 5・6：八幡編 1973 8・10：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995 11・17：宮本台遺跡調査団編 1974 12-16：佐藤・大内編 1994
- 第 2 図 20 万分の 1 土地分類基本調査『茨城』地形分類図をトレース，一部改変。
- 第 3 図 筆者作成。
- 第 4 図 1-7：美浦村教育委員会編 2012 8-18：茨城県教育財団 1982 19・26・27：美浦村教育委員会編 2011 20-25：佐藤・大内編 1994
- 第 5 図 1-7：佐藤・大内編 1994 8-15：美浦村教育委員会編 2011
- 第 6 図 1・2・10：美浦村教育委員会編 2012 3-9：佐藤・大内編 1994
- 第 7 図 筆者作成。
- 第 8 図 1-4：美浦村教育委員会編 2012 5-16：茨城県教育財団 1982
- 第 9 図 1：美浦村教育委員会編 2012 2・3：佐藤・大内編 1994 4-9：美浦村教育委員会編 2011

The Chronological Change in the Composition of Early Late Jomon Pottery
(*Horinouchi 2 style*) in the Coastal Area of Lake Kasumigaura

KAMEI, Tsubasa

The composition of early Late Jomon pottery (*Horinouchi 2 style*) is examined in this paper. These assemblages were placed into an established chronological stage based on their decoration. Historical changes in the composition of these pottery assemblages were also considered. The chronological sequence suggests that some types such as deep pots decorated with clay bands (紐線文系粗製土器), bowls decorated with thin clay bands (微隆帯土器) and inner decorated pots (内文土器) probably emerged during the latter stage of the Horinouchi 2 style.